J. G. バイロンと T. ムアが19世紀ロシア文学に与えた影響について
—ロシア・イギリス文化交流史のもうひとつの側面—

白　倉　克　文
基礎教育課程

On the Influence of J. G. Byron and T. Moore upon 19 th Century Russian Literature
—Another Insight into the History of Cultural Relations between Russia and England—

Katsufumi SHIRAKURA
Division of the Fundamentals of Arts
(Received October 31, 1995 ; Accepted January 10, 1996)

I. はじめに

本紀要創刊号に掲載の拙稿「ロシアにおける J.ウォーカー，C.クレアモント，および G.ボロー—ロシア・イギリス文化交流史の一側面—」において，18世紀末から19世紀前半にかけてロシアに滞在した3人のイギリス人について考察し，彼らの様々なロシア体験を吟味することを通じて，ロシアとイギリスの文化交流史の一側面を紹介した。本稿では，1820年代以後にイギリスロマン主義文学がロシアでいかに読まれたか，というテーマを取り上げることによって，両国の文化交流史のもうひとつの側面を追究してみたい。

イギリスロマン主義文学者の中から研究対象として本稿ではバイロンとムアとを選んだ。その理由は先ず第1に，2人がほぼ時を同じくしてロシアで広く愛読されたからであり，第2に，親友でもあった2人は思想的心情的に類似する面が多く，ロシアへの影響においても共通の要素を多々持ったからである。2人の名声は既に1810年代にヨーロッパ各地に広まっていたが，それは程なくロシアにも伝わり，少なからぬ著作がロシア語に翻訳された。2人の著作に対してロシアの若い文学者たちは各々特徴的な反応を示したのであるが，そうした反応は当時のロシアの文学状況を照射するものでもあった。2人から影響を受けた文学者の中で，ジュコフスキー，デカブリスト詩人たち，プーシキン，レールモントフ，及びゴーゴリの事例は特に興味深い示唆を与えてくれる。

バイロンは長らく名前のみ知られて実際に読まれることの少なかった作家であろうが，近年日本においても研究熱が高まり，優れた研究成果が発表されつつある[1]。一方ムアに関しては，往時は W.スコット，バイロンと並び称された作家でありながら，今日ではほとんど注目されることもなく，日本ではアイルランド民謡“Tis the last Rose of Summer’（『庭の千草』）や，‘Believe me, if all those endearing young Charms’（『春の日の花と輝く』）の作詞者としてのみ名を残している[2]。

II. バイロンの影響

1

ジョージ・ゴードン・バイロン George Gordon Byron (1788-1824年) は1812年に『チャイルド・ハロルドの巡礼』(*Childe Harold's Pilgrimage*) を出版して名声を博してより，1824年にギリシャのミソロンギで客死するまでの10数年間に次々と著作を発表してきた。出版年代順に代表作を拾うと，次のようなものが挙げられる。『異教徒』(*The Giaour*)，『アバイドスの花嫁』(*The Bride of Abydos*) (1813年)，『海賊』(*The Corsair*) (1814年)，『パリジーナ』(*Parisina*)，『コリントの包囲』(*The Siege of Corinth*)，『シヨンの囚人』(*The Prisoner of Chillon*) (1816年)，『マンフレッド』(*Manfred*) (1817年)，『ベッポ』(*Beppo*) (1818年)，『マゼッパ』(*Mazeppa*) (1819年)，『カイン』(*Cain*) (1821年)，『ドン・ジュアン』(*Don Jyan*) (1-14巻，1819-1824年)。

バイロンの著作は取材範囲が広く，登場人物が多彩で魅力に富んでおり，政治的また宗教的批判精神に満ち溢

れ，しかもそれらが優れた描写力に支えられていることで，ロシアの一部知識人の間では早くから原文で読まれていた。祖国を追われた追放者として生き，ギリシャ独立戦争に志願して客死を遂げるという勇壮な彼の生き方も人気に拍車をかけることとなった。最も早くからバイロンの著作に親しんだロシア人P. A.ヴャーゼムスキーは，早くも1821年の手紙に次のように書いて，バイロン文学の政治的傾向を巧みな比喩で言い当てた。「雲の中を飛翔しているバイロンは地上に降下して迫害者たちに激怒の雷を食らわせるのだが，彼のロマンチズムの色彩はしばしば政治的色彩と融合する。」[1]この手紙はバイロンの新作をほぼ出版と同時に原語で正確かつ深く読みこなしていた知識人がロシアにいたことを示す例である。また次に引用する，翌年1822年6月27日付のA. S.プーシキンの手紙は，バイロンの著作がロシア語に翻訳され始めた頃のイギリス文学の人気の高まりを伝えている。「『シヨンの囚人』を待ちきれぬ思いで待っています……イギリス文学がロシア文学に影響を持ち始めています。その影響の方が，憶病で気取ったフランス詩の影響よりも有益だろうと，私は思います。」[2]このようにして，バイロンは西ヨーロッパ諸国にさほど遅れることなく，ロシアでも注目を浴びるに至っていたことが明らかである。

次にバイロンの著作がロシア語に翻訳されていった経緯を調べてみたい。しかしその前に，著作に表現された彼の思想的特質を大まかに整理しておきたい。それは彼の政治的言動ともあいまって，翻訳活動に対する政府側からの強い弾圧を招くこととなったからでもある。

彼の文学全般から読み取れる思想的傾向として次の諸点を抽出することができよう。第1に，人間不信に起因する強い孤立感で，それは周囲に対する強い反感，時には復讐心を伴なう。第2に，自由への熱烈な希求であって，それはしばしば自由を奪われた人間の胸中を通して語られる。第3に，過去と現在の為政者に対して浴びせられる激しい政治批判である。第4に，顕著な無神論的な傾向であって，宗教上の偽善が暴露され，死後の世界への疑念が提起される。第5に，極端ともいえる自我の強調で，周囲との対立関係の中で生じる個人の誇り高い精神性が賛美される。

このような思想的特徴を持つバイロンの著作はロシアで厳しい監視を受けた。ロシア政府は彼を，その自由思想と無神論的傾向故に，またロシア諸皇帝への批判的言辞故に，危険な思想家と見なしていた。1821年頃には既に彼の著作は大多数が発禁処分を受けていた。新しく刊行される著作に関しても，外国から持ち込んで販売することはすべて禁止された。翻訳についても例外的な場合に限って許可され，しかも検閲による歪曲を被った挙げ句の出版が多かった。ロシア外務省は彼の政治的行動に神経をとがらせ，情報を広く各地より集めていた。当時の外務大臣K. V. ネッセリローデのもとにはバイロンの親友，詩人シェリーの溺死に関する詳しい情報も寄せられた。1827年の『異教徒』のプロローグの翻訳をめぐっては，検閲委員会が判断を下すことを恐れて，ネッセリローデに判断を求め，大臣自身が禁止の断を下したほどであった。

こうした厳しい状況にあっても，バイロンの著作のロシア語への翻訳は進められた。それは先ずフランス語から，次いで原文からも訳された。1821年に「ヨーロッパ通信」[3]の編集者であるM. T.カチェノフスキーが『ロード・バイロン集』という小型本を刊行した。翌1822年にはV. A.ジュコフスキーが『シヨンの囚人』を翻訳して刊行した。同年には『異教徒』の抄訳が訳者匿名の単行本で刊行されてもいる。1826年にはI. I.コズロフの翻訳になる『アバイドスの花嫁』が，検閲による歪曲を受けつつも，刊行された。彼は『チャイルド・ハロルドの巡礼』の翻訳も試みており，その一部は1834年に雑誌掲載された。『ドン・ジュアン』は1847年に部分訳が刊行され始めたが，完全な訳が発行されたのは20世紀になってからのことであった。このようなわけで，バイロンの著作のロシア語への翻訳に関しては，政府側からの監視の影を濃厚に見て取ることができる。

翻訳とは別に，個人的エピソードに関する半空想的な創作が早くから試みられたことも，ロシアにバイロン熱を煽ることとなった。既に1822年に，詩人P. A.ガベは長大なエレジー『牢獄のバイロン』を書き上げたが，これはヴャーゼムスキーの尽力もあって，同年の「祖国の息子」[4]誌に掲載された。バイロンの翻訳を手掛けていたコズロフは，彼の伝記を詩で表現することにも意を傾け，1824年に『バイロン』を，1825年には『ヴェネチアの夜』を創作した。後者はデカブリスト詩人A. A.ベストゥージェフとK. F.ルイレーエフの刊行になる文集「北極星」[5]に発表され，広く読まれることとなった。

2

バイロンの思想と生き方に深く共鳴し，最も直接的にその感化を受けたロシア人として，先ずデカブリストの名を挙げることができる。バイロンがロシアで人気を博するに至った時期は，彼らの活動が高まりを見せた時期と一致している。P. I.ペステリを指導者に「南方結社」が結成されたのは1821年であり，「北方結社」がN. M.ムラヴィヨフを中心に結成されたのは翌1822年であったが，その頃より１８２５年12月の蜂起に至る時期は，バイロンがロシアで最も愛読された時期でもあった。デカブリストたちによるバイロンへの共感が最も見事に表現

されているのは，彼の死（1824年５月）に寄せた彼らの追悼文である。たとえば，死刑を執行された５人の受刑者の１人，K. F.ルイレーエフは，『バイロンの死に寄せて』と題する追悼詩を書いている。そこでバイロンは「ソクラテスの知恵とカトーの魂」を持つ人物として，また，「シェイクスピアに勝利した人物」として崇められている。詩の末尾は，「彼の突然の死を喜んだのはただ暴君と奴隷のみ」[6]という名文句で飾られている。もう１人のデカブリスト，A. A.ベストゥージェフは友人ヴャーゼムスキーに宛てた手紙の中で，バイロンに触れて次のように記している。「彼は死んだ。しかし何と羨むべき死であったことか。彼はギリシャのために死んだのだ。……彼はその驚くべき才能を通して，偉大な真理を人類に遺産として残し，その魂の高潔さを通して，崇高な詩人たちにとっての手本を残した。……自己愛に陥ることなく全人類の利益のために活動した数少ない人間のひとりとして，歴史は彼を数えることになるだろう。」[7]このように多くのデカブリストたちがバイロンに共鳴を寄せ，彼から影響を受けたのであるが，それは必ずしもバイロンの実像に基づくものではなかった。ルイレーエフとベストゥージェフが描いたバイロン像からは，明らかに理想化と偶像化とが感じ取られる。偶像化されたバイロン像に自己の行動原理の一端を求める傾向は，他のデカブリストたちにも共有されたものと推定される。

ところでこのA. A.ブストゥージェフ（1797-1837年）は後に「ロシアのバイロン」と称せられるに至った人物であるが，彼については次節で述べるプーシキンとの関連もあって，少し詳しく付言しなければならない。彼は２人の兄弟と共にデカブリスト運動に参加し，乱の後，シベリアのヤクーツクに流された。その後兵卒としてコーカサスの戦線に送られ，1837年，原住民との戦闘中，山中深く行方を断ってしまった。彼は「マルリンスキー」のペンネームでコーカサス時代に多くの小説を書き，1830年代にはロシアで最大の人気作家となっていた。

「ロシアのバイロン」の呼称にふさわしく，彼が文字通りバイロンに心酔していた様子は，時々の彼の手紙から窺い知れる。1825年，即ち蜂起の年にプーシキンに宛てた２通の手紙の中で，ベストゥージェフはプーシキンの近作『エブゲーニイ・オネーギン』に触れつつ，バイロンを引合いに出して，次のように記す。「あなたが描いた多くの描写はもちろん魅力的だ。しかしそれらは完璧ではない。あなたはペテルブルグの社会を捉えはしたが，見抜きはしなかった。バイロンを読みたまえ。ペテルブルグを知らずとも彼にはその肖像が描けたのだ。彼が人々をありのままの姿で理解しているが故にこそ，それは可能なのだ。不自然で馬鹿げた彼の台詞の中にさえも，鋭い哲学的考察が含まれているのだ。しかも風刺ときたら，なんと表現し得ようか！」[8]もう１通の手紙には次のようにも記されている。「私はイギリス文学を情熱的に吸収しているところだ。そして私は英語に心から感謝する。……できるならば英語を学びたまえ。百倍もの報酬が努力に対して得られるだろうから。」[9]

シベリア流刑中に孤独を癒してくれたのも，バイロンを初めとするイギリス文学であったことが手紙に述べられている。小説家として油の乗り切ったコーカサス時代にバイロンへの熱中が殊更深まっていたことが，編集者ポレヴォイ宛の1831年の手紙に窺える。「私の内的世界は奇跡的なものとなりました。バイロンの『闇』を読めばそれがどういうものか，ある程度理解できるでしょう。」[10]このようにして，ベストゥージェフ（マルリンスキー）はバイロンの影響を終生にわたって直に被った，いわば彼の生き方と思想に殉じた人物として捉えることができる。一方，彼からバイロンを読むように勧められたプーシキンは，バイロンにどう反応したのであろうか。

3

バイロンとロシア文学との関係を考察する際の最大のテーマは，彼がA. S.プーシキン（1799-1837年）に及ぼした影響である。ベストゥージェフに勧められるまでもなく，プーシキンは早くからバイロンの著作を読んでいた。そしてそれらの読み方において，２人は類似した面を持ちつつも，対照的な相違を示すことになる。

プーシキンがバイロンの著作に親しみ始めたのは，1820年５月末から始めるラエフスキー将軍一家とのコーカサス・クリミア旅行中であった。彼がバイロンの著作を原語で読んでいたことは，英語からフランス語に訳された『異教徒』の手稿が残されていることからも明らかである[11]。バイロンへの熱中はかなり長い期間，即ち20歳代前半の４，５年間，続いたようである。当時彼は反政府的言動に起因する追放者の立場に身をおいていたが，彼を監視する役職にあったベッサラビア州全権総督，M. S.ヴォロンツォーフ伯爵は，1824年３月，外務大臣ネッセリローデ宛の手紙でプーシキンを次のように評している。「実のところ彼はあまり尊敬し得ぬ手本―バイロン卿―の虚弱な模倣者にすぎません。」[12]この時期のバイロンへの熱中ぶりはプーシキン自身も認めており，1830年に書いた評論『批評を駁する』には次の文章がある。「『バフチサライの泉』は『コーカサスの捕虜』よりも弱い。そしてそれと同様にバイロンの読書の反響がある。その頃私はバイロンに夢中になっていた。」[13]物語詩『バフチサライの泉』を執筆していた頃（１８２１-23年），バイロンはまだ存命中であり，10歳程しか年が違わないプーシキンにとってバイロンはほとんど同時代の人間であっ

た。当時彼が書いた叙情詩の中に『ギリシャ娘に』と『外国の女に』とがあるが，それらは「かつてバイロンと接吻したことのあるギリシャ娘」に寄せられたものとされている。彼は友人ヴャーゼムスキーに宛てた手紙の中で，カリプソ・ポリフロニというこの女性を彼に紹介しようと申し出ている[14]。

しかしプーシキンのバイロンへの心酔はベストゥージェフの場合とは異なって，一時的であった。変化の兆しは1824年に作られた有名な詩『海に』に既に現れている。この詩は新たな幽閉の地ミハイロフスコエ村に向かうプーシキンがオデッサの海との別れを歌ったものであるが，ここでバイロンの死についても言及している。バイロンはナポレオンの後に没した「もうひとりの天才」として，次のように描写されている。「そこでは　かれが苦悩にかこまれて眠っている。そしてかれについで　嵐のどよめきさながらに，もうひとりの天才が　この世から走り去った，いまひとりの支配者　わたしたちの思想の支配者が。／消えてしまった，自由にとっての痛手となり，この世界に自分の栄冠をのこしたまま。どよもせ　荒れ模様に波さかまくがいい　おお海よ，その人はおまえの歌い手だったのだから。／おまえの姿は　その人の姿に示され，その人は　おまえの魂によってつくられた。おまえのように　たくましく　深く　陰鬱で，おまえのように　なにものにもおさえられなかった。」[15]この詩においては，バイロンへの賞賛はバランス感覚に支えられた，抑制されたものとなっており，ルイレーエフやベストゥージェフがそうであったような，極度に高揚した感情移入が見られない。プーシキンはこの時期には既に，バイロンを客観的，相対的に観察し，彼の本質をその欠点をも含めて冷静に把握するようになっていた。この時点で2人のデカブリスト詩人とは決定的に隔たった地点に達していたわけである。

バイロンへのこうした客観的な観察は次第に彼に対する批判へと導かれる。1825年7月N. N.ラエフスキーに宛てた手紙で，プーシキンはシェイクスピアと比較しつつ，バイロンを次のように評している。「シチュエーションのもっともらしさ，対話の真実さ―それが悲劇のまことの法則だ……しかしシェイクスピアはなんという驚くべき男だ。私はいまだにわれに返れずにいる。シェイクスピアにくらべたら，悲劇作家のバイロンなんて実にちっぽけな存在だ！バイロンは唯一の性格しか認めなかった（彼の女性には性格がなく，彼女たちはきまって若いころに恋の情熱に身を委ねる。それが彼があんなに容易に女性を描くことのできた理由なのだ），彼はそれゆえに作中人物たちに自分の性格のしかるべき特徴を分与したにすぎない。ある人物には自分の傲慢さを，ある人物には自分の憎悪を，ある人物には自分のメランコリイを。そうしてひとつの充実した，暗い，エネルギッシュな性格でもって，彼は多くの無意味な性格を作り上げた，―そこには悲劇などがあり得るはずがない。」[16]

こうした批判的な見解をさらに詳しく展開したものとして，1827年に書いた短評『バイロンの劇について』がある。『マンフレッド』と『カイン』を取り上げ，次のような否定的な評価を与える。「バイロンは一方的な見解を世界と人間の本性に向かって投げつけ，そしてそれから顔をそむけ，自分自身の中にのめりこんでしまう。彼はわれわれに彼自身の幻を提示したのである。」[17]この文章の後に，「結局彼はただひとつの性格（つまり彼自身の）をとらえ，創造し，描写しただけ」であると記して，先に引用した手紙文と同じ主張を繰り返している。

バイロンに対するプーシキンの評価の変遷をこのように辿ってみると，バイロンに殉ずる形で一生を終えたベストゥージェフとの対照性がくっきりと浮かび上がってくる。バイロンに対する評価の変化は，創作方法に関するプーシキン自身の考え方の変化と密接に絡んでいるのであって，その意味において，バイロンを批判し，彼を乗り越えることがプーシキンにおけるリアリズム文学の確立につながったとする説は強い説得力を帯びてくる[18]。

しかしここで注目すべきことは，バイロンに対する批判的傾向を強めた後にも，プーシキンが彼に深い関心を抱き続けたことである。また，批判は主としてバイロンの悲劇に寄せられたことにも留意しなければならない。プーシキンはバイロンの新作を熱心に読んでいた。1825年11月のヴャーゼムスキー宛の手紙に彼は次のように記す。「『ドン・ジュアン』は何とすばらしい作品だ！私は最初の5章しか知らない。最初の2章を読んでからすぐ私はラエフスキーに，これはバイロンの傑作だと言ったが，ウォルター・スコットも同じ意見だと知って，とても嬉しかったよ。」[19]プーシキンが『ドン・ジュアン』の続編をさらに読み続けたことは，1828年に書いた評論文の内容から明らかである。「バイロンは自分自身の目で見たことのない国は決して描写に着手しないと語った。ところが『ドン・ジュアン』の中で彼はロシアを描いているが，土地柄に矛盾するいくつかの誤りが明らかである。」[20]この文章の後に，誤った描写の具体的な例として，『ドン・ジュアン』の「第8歌」と「第9歌」とから文例を示している。ロシアの描写の不備を指摘することでバイロンを非難しているかのような印象を与える文章であるが，プーシキンの本心が彼を些事に関して中傷することにあるのではなく，ロシアに関する彼の博識を正当に認識しようとの意図にあることは，次に続く文章から明

白である。「バイロンはロシアについてたくさん読み，人に尋ねた。彼はロシアを愛し，その最新の歴史を熟知していたらしい。自作の詩の中で，かれはロシアについて，我々の習俗について，しばしば語っている。」

決闘で没する前々年の1835年に，プーシキンは『バイロンと重要な論題について』[21]と題する伝記的作品を著している。このことは彼が最晩年までバイロンに深い関心を抱いたことを示している。プーシキンにとってバイロンが生涯の関心の的であり続けたのは，両者が共に，変化と進歩を求めてやまない作家であったためだと思われる。

III. ムアの影響

1

バイロンと同じ時期にロシアで広く読まれたもう1人のイギリスロマン主義作家はトマス・ムア Thomas Moore (1779-1852年) である。アイルランドのダブリン生まれの彼は，トリニティ・コレッジ在学中に祖国の独立運動と深い係わりを持ったが，そのことはその後の創作活動に深い影響をもたらすこととなった。代表作として『アナクレオン頌詩集』(*Odes of Anacreon*) (1800年)，『アイルランド歌謡』(*Irish Melodies*) (1808-1834年)，『2ペンスの郵便袋』(*The Two-Penny Postbag*) (1813年)，『ララ・ルーク』(*Lalla Rookh*) (1817年)，『パリのファッジ家』(*The Fudge Family in Paris*) (1818年)，『天使の恋』(*The Loves of the Angels*) (1823年)，『エピキュリアン』(*The Epicurean*) (1827年)，『イギリスのファッジ家』(*The Fudge Family in England*) (1835年) 等があり，創作分野は叙情詩，物語詩から政治風刺詩，さらには小説にまで広がっている。彼はバイロンの親友でもあって，1830年に『バイロン卿の手紙と日記』(*Letters and Journals of Lord Byron*) を刊行している。スコット，バイロンと並んで一世を風靡していた彼の著作は，ロシアにおいても早くから読者を得ていたが，殊に広く読まれた著作として『ララ・ルーク』と『アイルランド歌謡』とがある。そこでこの2作品を取り上げて，両者がロシア文学に及ぼした影響を考察してみたい。先ず両作品がロシア語に翻訳された経過を個々に辿ってみよう。

『ララ・ルーク』は韻文と散文が巧みに組み合わされた独特の形式の物語であるが，その概要は次のようである。カシミール地方を旅していたブッカリア王が旅先で王女ララ・ルークを知り，彼女と自分の息子との縁談を取り決める。彼女は挙式の場所への旅を始めるが，この旅に吟遊詩人のフェラモルツが同行し，旅の先々で4つの話を楽器に合わせて物語る。やがて2人は恋に落ち，目的地に近づくにつれて，ララ・ルークは迫り来るフェラモルツとの別れを予想して嘆き悲しむ。しかし実はフェラモルツは王子がララ・ルークを驚かせるために変装した姿なのであって，2人はめでたく結ばれ，末永く幸せに暮らす。物語全体はこのような構成を持つが，その中で個々に独立した4つの物語がフェラモルツによって語られる。『ララ・ルーク』の主要部分は，韻文で書かれたこれら4編の物語である。第1の物語は「コラッサンの覆面予言者」'The Veiled Prophet of Khorassan'と題された悲恋物語である。第2の物語「天国とペリ」'Paradise and The Peri'では，堕落天使の子孫である妖精ペリが天国への帰還を許されるために体験する様々な出来事が述べられる。第3の物語「拝火教徒」'The Fire-Worshippers'は古代ペルシャの拝火教徒とイスラム教徒との抗争を背景に，宗教を異にする男女の悲恋が語られる。最後の「ハラムの光」'The Light of The Haram'は，セリム王の妻ヌルマハルが魔術師の力を借りて夫の愛を取り戻すに至る話で，花々に包まれた幻想的な雰囲気の中で物語が進行する。いずれの物語も東洋的異国情緒に溢れるロマンチックな題材に基づくが，最も注目すべきは第3話の「拝火教徒」である。そこでは，追いつめられて滅びゆく弱小民族の抵抗の過程が強い共感と同情を込めて，感動的に語られている。

『ララ・ルーク』に感動し，最も早くロシア語への翻訳を試みた1人に，詩人 V. A.ジュコフスキー (1783-1852年) がいる。彼が『ララ・ルーク』に初めて触れた経緯は，この作品が当時ヨーロッパで博していた人気の度合を知る上からも興味深い。大公妃アレクサンドラ・フョードロヴナ（後の皇帝ニコライ1世の妻）のロシア語教師としてジュコフスキーがベルリンに滞在していた1821年冬，王室大宮殿で『ララ・ルーク』の劇が2度にわたって上演された。これは当時の高名な音楽家や芸術家の協力のもとに，王侯貴族が登場人物に扮して上演されたものであり，ニコライとアレクサンドラが主役を演じていた。ジュコフスキーはこの劇を観て大いに感動し，友人 A. I.トゥルゲーネフに宛てた手紙の中で，観劇中の印象を次のように記した。「喜びを得たのは感覚でも想像力でもなく，魂であり，ふと我に帰ると甘美を帯びたある種の淋しさを感じていた。」[1]その後彼は『ララ・ルーク』の原文を日記に書き写し始め，さらには第2話「天国とペリ」の翻訳に着手した。この翻訳は「ペリとエンジェル」のタイトルで年内に「祖国の息子」誌に掲載された。翻訳にとどまらず，ジュコフスキーは『ララ・ルーク』というタイトルの詩を作っており，さらに『ララ・ルークの姿で現れた詩的感興』という翻訳詩をも発表している。ロシアのロマン主義を代表するこの詩人がムアの著

作に深く傾倒する時期を持ったことは，もっと注目されてよい事実と思われる。

特異な経過を経て始まったジュコフスキーの翻訳であったが，しかしこれは『ララ・ルーク』の最初のロシア語訳ではなかった。同じ1821年，しかし彼の翻訳が発表されるよりも前に，K. P. B.の翻訳者名で同じ部分の翻訳，すなわち「天国とペリ」が雑誌「啓蒙の競争者」[2]に発表されていた。ムアが原書を発刊してから4年足らずで，『ララ・ルーク』はロシアでも注目を集める書となっていたわけである。同じ年にはN. A.ベストゥージェフが第3話「拝火教徒」を散文訳で同じ雑誌に発表してもいた。彼はA. A.ベストゥージェフの実兄で，後にデカブリスト運動の有力な指導者となった人物である。ムアの著作の翻訳に最も意欲的に取り組んだのは，バイロンの紹介でも活躍したI. I.コズロフであるが，彼は第1話「コラッサンの覆面予言者」の韻文訳を試み，その部分訳を1823年に雑誌「文学情報」[3]に掲載した。第1話の全文訳は1829年に別の翻訳者によって匿名で発表されている。第4話「ハラムの光」は1827年に「祖国の息子」誌にやはり翻訳者名を秘して掲載された。こうして『ララ・ルーク』は曲がりなりにも全4話のロシア語への翻訳が達成されたわけである。1836年には全文を通しての翻訳が試みられたが，完成に至らなかった。20年近くにもわたって，多くの人々が脈々と『ララ・ルーク』の翻訳に取り組んだ事実は，この書がロシアで得た人気の根強さを証明するものである。

次にムアのもうひとつの代表作である『アイルランド歌謡』を検討したい。原作の刊行は1808年にダブリンとロンドンとで始められたが，それは1834年に第10巻の完結をみるまで，延々四半世紀にわたって続けられた。120余編からなるこの叙情詩集には，そのいずれにも快いリリシズムが漲っているが，それと同時に，苦難な状況下にある祖国アイルランドへの著者の熱い思いが貫流しており，祖国の自由と独立への切願が多くの詩行に込められている。ロシア語への翻訳が始められたのは，『ララ・ルーク』とほぼ同じ1820年代に入ってからであるが，次に，翻訳の経過を原作の各詩篇のタイトルを表示しつつ，辿ってみよう。

初期の翻訳はフランス語版からの散文訳が主であった。1822年に雑誌「善意」[4]に掲載された次の4編が最初のロシア語訳と思われる。'She is far from the Land', 'The Legacy', 'At the mid Hour of Night'，そして'Oh, blame not the Bard'。翌1823年には雑誌「女性雑誌」[5]に，まず'You remember Ellen', 'Come o'er the Sea'が掲載され，次号には最も有名な詩篇"Tis the last Rose of Summer'が掲載された。『ララ・ルーク』を翻訳したコズロフは『アイルランド歌謡』の翻訳にも尽力した。有名な'The Minstrel Boy'を1823年に，'As a Beam o'er the Face of the Waters may glow'を1825年に，そして1828年には'At the mid Hour of Night'を，「文学情報」誌に韻文訳で発表した。彼はやがて「ロシアのムア」と呼ばれるに至った[6]。同じ頃『アイルランド歌謡』の翻訳に取り組んだ人にD. P.オズノビシンがいる。1827年に'Erin! the Tear and the Smile in thine Eyes'，1828年に'The Minstrel-Boy'，1829年には'Oh! breathe not his Name'を発表した。1928年にはまた，ディレッタント的な翻訳家M. P.ヴロンチェンコによる次の5作品が雑誌に掲載され，翻訳として高い評価を受けた。'Oh banquet not', 'Sail on, sail on', 'Oh! breathe not his Name', 'How dear to me the Hour'，及び'As a Beam o'er the Face of the Waters may glow'。

1830年代になっても『アイルランド歌謡』の人気は続き，様々な形で詩集や雑誌に翻訳が繰り返し掲載された。印刷されないまま残された手稿が数多く存在するし，小説のエピグラフとしても頻繁に利用された。模倣したもの，もしくは変形を加えた作品も多く発表され，たとえば，『ドン・ジュアン』の翻訳者V. I.リュービチ＝ロマノヴィチが1832年に発表した自作詩集には，『アイルランド歌謡』からの自由訳が若干含まれている。1840年代になると韻文への関心が全般的に低下し，ムアの叙情詩への関心も次第に薄れていった。そうした中でムアに傾倒したのは，I. P.クレシェフで，彼は『ララ・ルーク』の第4話「ハラムの光」の翻訳を進める一方で，『アイルランド歌謡』の翻訳にも意を注ぎ，1842年の「祖国の息子」誌に，"Tis the last Rose of Summer'を発表して，既に他の訳を得ていたこの名唱の普及に寄与することとなった。彼はこの他にも，'The Origin of the Harp', 'When he who adores thee'，及び，'I saw from the Beach'等の名訳を残した。

2

『ララ・ルーク』と『アイルランド歌謡』がロシア語に翻訳された経緯をこのように辿ってみると，ムアの著作が1820年代以降，ロシアで広範かつ長期にわたって愛読されていたことがよく理解できる。したがって彼の著作はロシアの文学者に多大な影響を与えずにはおかなかったが，若き日のゴーゴリとレールモントフの創作活動にも顕著な痕跡を残している。2人への影響は長期にはわたらず，短期的なものであったと考えられる。しかし少なくとも，両者が一時期ムアの著作から多少なりとも感化を受けたことは明らかであり，両者が19世紀のロシア文学を代表する作家に成長しただけに，この事実は文学史的に少なからずの意味を持つものと思われる。

N. V.ゴーゴリ（1809-1852年）の最も初期の作品に，1829年刊行の『ガンツ・キュヘリガールテン―田園叙景詩―』がある。V.アーロフの筆名で自費出版したが，不評を気にして本屋からすべて買取り焼却してしまったという，いわく付きの作品であるが，この「田園叙景詩」の第4景には，『ララ・ルーク』の第4話「ハラムの光」からの直接的影響が見られる。主人公ガンツの青春の夢想が第3景と4景にわたって叙述されるが，第4景の叙述では，ムアが「ハラムの光」で使用した特殊な用語がそのままの形で用いられている。即ちガンツの夢に現れる「ペリ」を説明する場面で，「ゲマサガーラ」，「シリンダ」，「イスラズィール」，「ヒンダラ」，等の奇妙な用語が使われるが，これらはいずれもムアが用いた用語であり，しかも原文で注を施した特殊用語である[7]。「ハラムの光」は1827年に「祖国の息子」誌に翻訳が掲載されたので，ゴーゴリはこの翻訳を読んでいたものと思われる。ゴーゴリはこの作品を最後に韻文から遠ざかり，再びそれに戻ることはなかった。一時的にムアを愛好したことがあっても，その影響は深いものではなかったと思われる。むしろ，ムア的な要素からできるだけ早く遠ざかったところに，ゴーゴリの新しさと真骨頂を見るべきなのであろう。

M. Yu.レールモントフ（1814-1841年）に関しては，いくつかの初期作品に対してムアの叙情詩が影響を与えたことが指摘されている。レールモントフはバイロンについては自作の詩の中で直接名前を挙げて彼への憧憬を明らかにしているが[8]，ムアに関しては影響関係を何ら明示していない。従ってムアとの関係は看過されがちであるが，レールモントフの学生時代の文学的背景を知る上からも，両者の影響関係はもっと注目されてよいものと考えられる。『アイルランド歌謡』の影響が顕著であるとされるものとして，次の4点が挙げられる。レールモントフの『ユダヤのメロディ』（1830年）に対する'As a Beam o'er the Face of the Waters may glow'，『吟遊詩人の歌』（1830年）に対する'The Minstrel-Boy'，戯曲『奇妙な男』（1831年）中の挿入詩『無分別と熱情の日々の思い出のみを』に対する'When he, who adores thee'，そして叙情詩『ロマンス』（1832年）に対する'Go where Glory waits thee'。さらにもうひとつ影響関係がはっきりしている組み合せとして，『アイルランド歌謡』には含まれていないムアの叙情詩'The Evening Gun'と，レールモントフの詩『覚えていますか』[9]とがある。

これら5組の影響関係を個々に調べてみると，最後の例のようにほぼ逐語訳に近い場合もあるし，また最初の例のように，原作からは創作のモチーフを借用しただけで，主として自分自身の感興を表現している場合もある。いずれにしても原作者についての指摘はなく，これらの詩はレールモントフ自身の創作であるかのような印象を与える。

レールモントフはモスクワ大学付属寄宿学校に在学中にムアの著作に親しんだものと思われる。ここでは当時ムアの作品が英語教育教材として利用されており，研究発表会のテーマとしてムアが選ばれることもあった。レールモントフがムアの叙情詩から作意を得て作詩したのは，彼が16歳前後の頃であったと想定される。彼はムアからモチーフを借用しつつも，原詩の字句に拘泥することなく，自由に自己のイメージを展開しており，自分自身の作品として結実させることに成功している。ムアから受けた感化がどの程度深いものであったかは明らかでないが，若き日のレールモントフにとって，ムアが創造上の糧を提供した1人であったことは疑いの余地が無い。

3

ゴーゴリとレールモントフがムアの著作に親しんだのは1830年前後であったが，実はムアから最も深く直接的な感化を受けたのはその前の世代，即ち，デカブリストの世代であった。デカブリストたちがムアに共感を寄せていたことを示す次のようなエピソードがある。死刑を執行された1人M. P.ベストゥージェフ＝リューミンは，死刑執行の前夜，牢番を介して，監禁中の仲間に紙切れを配布した。そこには『アイルランド歌謡』の中の1篇'On Music'を，自らフランス語に訳した文章が綴られていた。音楽の持つ力の不滅性を称えるこの詩に託して，彼は死に臨む自己の心境を伝えたものと思われる。

ムアの心情と思想に最も親近感を抱いたデカブリストにN. A.ベストゥージェフがいる。前に述べたように，彼は1821年に『ララ・ルーク』の第3話「拝火教徒」を訳して発表したが，それは彼が，この物語に表現されている思想に強い共感を覚えたからであったと思われる。ここでは，自由と独立を求めて戦い，やがて孤立し滅亡してゆく者たちの行動が，共感を込めて描かれているのだが，登場人物の心情と，決起に至るまでのデカブリストたちの心情とには，相通ずるものが多々あったのであろう。ベストゥージェフは乱に失敗して断罪された後にも，ムアへの評価を変えなかった。彼は流刑地で，『ルイレーエフの思い出』と題する文を書いたが，ルイレーエフの詩を引用した後に次のような感想を記している。「これらの詩行の中にルイレーエフの詩の長所と短所が最も見事に表現されている。しかしこの詩はムアの最良のアイルランド歌謡と同列に並び得るものであると，言わない者は無いだろう。」[10]ベストゥージェフにとって『アイルランド歌謡』は作詩上の規範とさえなっていたわけである。

ベストゥージェフと同様に乱の後にもムアに心酔し続けたデカブリストは他にも多い。そうした1人にA. I.オドーエフスキーがいるが，彼の名前は，流刑中のデカブリストに寄せたプーシキンの詩（1827年）に対する返詩によって，今日でもよく知られている[11]。「わたしたちの悲しい事業は亡びない，火花（＝イスクラ）からやがて炎が燃えあがる。」「わたしたちは鉄鎖を鍛えて剣を作る，そして自由の炎を再び燃えあがらせる」[12]，等の名句を散りばめたこの詩は，その1節がロシア社会民主労働党の機関誌のタイトルとして使われたこともあって，ロシア史の中で象徴的な意味合いを帯びるに至った。オドーエフスキーはこの詩の作詩とほぼ同じ頃に，『アイルランド歌謡』の中の'Remember thee'をロシア語に翻訳している。原詩では自由を奪われたアイルランドへのひたむきな愛が詠われているのであるが，オドーエフスキーによる翻訳では，ムアの表現をほとんどそのまま利用しつつも，アイルランドへの愛は翻訳者自身が抱くロシアへの愛へとごく自然に転化されている。「おまえを覚えていないかだって？生きている限り，私は零落したおまえを決して忘れはしない。悲哀の中，嵐の薄明りの中にいるおまえは，陽に照らされた他の全ての世界よりも貴いのだ……」[13]原作者ムアと訳者オドーエフスキーとの心情が見事に重なっているのである。

4

最後にムアの著作に対するプーシキンの反応を調べてみよう。デカブリストとは同じ世代に属し，思想的にも比較的近い立場にあったにもかかわらず，ムアに対する捉え方においては，両者の間に顕著な相違が見られる。その相違はちょうど，バイロンに対するA. A.ベストゥージェフ（マルリンスキー）とプーシキンとの相違に通じるものであって，文学者としてのプーシキンの独自性を証明するものである。

プーシキンがムアを知ったのは友人ジュコフスキーの翻訳と作詩を通してであったと思われる。有名な詩『アンナ・ケルンに寄せて』（1825年）の中で，プーシキンは「けがれない美しさの化身」という表現を2度繰り返しているが，この独特の表現は，ジュコフスキーが1821年に作った詩『ララ・ルーク』から借用した表現である[14]。プーシキンが自作にムアの著作そのものから引用した例もある。『1829年の遠征時のエルズルム紀行』では，チフリスの公衆浴場にいる女性の美しさを描写する場面で，次のように記している。「その中の多数の女たちは，実際にまことに美しく，T.ムアの空想の正しさを証明していた。」[15]この後に『ララ・ルーク』の詩行がそのまま英文で引用されている。このようにしてプーシキンが早い時期からムアの著作に翻訳や原文で親しんでいたことが明らかである。

しかし注目すべきはプーシキンが『ララ・ルーク』に対して手紙の中で執拗に厳しい批判を浴びせたことである。彼は先ず1822年1月のヴャーゼムスキー宛の手紙で，ジュコフスキーによる翻訳に触れつつ，次のように記している。「ジュコフスキーには腹が立ちます。あんなムアのどこが彼の気に入ったのだろうか。醜悪な東洋的空想のぎこちない模倣者に過ぎません。『ララ・ルーク』のすべてをもってしても，『トリストラム・シャンディ』の10行に及ばないのです。」[16]また同年6月のN. I.グネジチ宛の手紙では，バイロンの『シオンの囚人』と比較して『ララ・ルーク』を酷評し，それに「ムアのゆがんだ物語」という辛辣な表現を与えている[17]。時を挟んで1825年春のヴャーゼムスキー宛の手紙にはムアに対する批評が次のように述べられている。「私がなぜムアを好まないか，知っていますか。彼があまりに東洋的過ぎるからです。彼の模倣の方法は子供っぽく，ゆがんでいます。……ヨーロッパ人は東洋の華美に陶酔している場合でも，ヨーロッパ人としての美的センスと鑑識を保持しなければなりません。バイロンが『異教徒』においても『アバイドスの花嫁』その他においてもとても優れているのは，こうした理由によるのです。」[18]同年秋のやはりヴャーゼムスキー宛手紙では，バイロンから託された文書類をムアが焼却してしまったという事件を論じつつ，「ムアのこの行為は彼の『ララ・ルーク』（彼の詩の面で）よりも，ましである」[19]と記している。

このようにして，プーシキンのムアに対する評価はきわめて厳しいものであり，ジュコフスキーやデカブリスト詩人たちのそれと著しい相違を示している。これは文学的創造に対する当時の彼の考え方を反映したものでもあって，新しい創作方法を希求する彼にとって，『ララ・ルーク』はもはや批判の対象でしかなかった。そして彼のこの評価はその後の文学史の流れを予告するものとなった。イギリスにおいてムアはバイロンやL. スターンと較べて極めて小さい影響力しか持ち得なかったし，ロシアにおいても，『ララ・ルーク』は一時的なブームに終わってしまい，厳しい検閲下にあったバイロンの著作ほどにも顧みられなくなってしまった。ムアの評価においてプーシキンはその慧眼を遺憾なく発揮したと言える。

IV. おわりに

バイロンとムアは親友であった。バイロンがこの年長の友に深い親愛の情を覚えていたことは，1816年のクリスマス前日に書かれた彼の手紙[1]によく示されている。彼はムアに遺言で自分の手記を委託し，ムアはそれを利用しつつ，バイロンの評伝を発表した。両者のこうした

親密な関係は思想的，心情的な類似性，共通性に根ざしていたのであって，両者の著作には共通する要素が多々見受けられる。従ってロシア文学に与えた影響においても，両者には共通する面が色濃く漂う。

２人の登場を歓迎し，その著作に最も敏感に反応したのはデカブリストたちであった。彼らは，バイロンとムアとが各々の著作で一致して主張した，隷従からの脱却，精神的自由の達成，理不尽な迫害者への抵抗，等々の理念に共鳴した。ルイレーエフ，ベストゥージェフ兄弟，オドーエフスキー，その他の人々の詩や手記にはそのことがよく表現されている。彼らは反乱に至るまでの時期に２人の著作から多くを吸収したし，また反乱の後にもその評価を大幅に変えることはなかった。

プーシキンはデカブリストと同じ世代に属し，心情的にも近い立場にありながら，バイロンとムアに対して彼らとは異質な反応を示した。彼はバイロンには終生関心と敬愛の念を抱き続け，一時的には文字通り熱中したこともあった。しかしその時期を除いては，彼はA. A.ベストゥージェフとは違って，一定の距離を置いた冷静な態度でバイロンの著作に接した。その端的な例として，シェイクスピアと対比してバイロンを批判した手紙が挙げられる。プーシキンはバイロンの真価を認めつつも，彼の欠点を見極めることによって，独自の道を厳しく追求していった。他方ムアに対して彼はその価値をほとんど認めようとしなかった。その際にスターンの小説『トリストラム・シャンディ』と比較して『ララ・ルーク』を批評していることが特に注目される。新しい創作手法を模索しようとするプーシキンの文学的立脚点が，この点にも示されているからである。

バイロンとムアの影響は次の世代であるゴーゴリとレールモントフに対しては，はるかに和らいだものとなっている。1830年頃レールモントフはムアのいくつかの詩の名訳を残しているし，同時に，バイロンの生き方への強い憧れを詩を描いてもいる。青少年期の彼がごく自然に両者の作品に親しんでいたことがわかる。ゴーゴリも，その処女作ともいえる詩物語にムアからの直接的引用を施したことで，やはりイギリスロマン主義文学の刻印を押されたことが立証される。しかしこの刻印は長く残らず，むしろ，ムア的なものから急いで遠ざかったところに，文学者としてのゴーゴリの新しさがあった。

長きにわたるイギリスとロシアの文化交流史の中でも，バイロンとムアに代表されるイギリスロマン主義文学がロシア社会に与えた影響は，最も甚大であったと考えられる。２人の著作の翻訳と紹介に携わったのはジュコフスキー，コズロフら，当時一流の文学者であったし，その結果ロシアに流布した彼らの思想と心情はデカブリストたちの行動に強い影響を及ぼした。プーシキンはバイロンを踏台として，またムアを反面教師として，自己の創造性を高め，そのことによって，以降のロシア文学の隆盛の出発点ともなった。バイロンとムアは19世紀前半の多くの文学者に様々な波紋を及ぼしたのだが，そのことによって，この時期のロシア文学研究の貴重な手がかりを今日なお提供し続けている。

註

I

1）例えば，小川和夫訳『ドン・ジュアン』上，下（冨山房，1993年），田吹長彦注解『チャイルド・ハロルドの巡礼』第１編，第３編(九州大学出版会，1995年，1993年)，など。また，岡本成蹊他訳『バイロン全集』全５巻（昭和11年，那須書房）の復刻（日本図書センター，1995年）。

2）なお，ムアの代表作『ララ・ルーク』の第２話「天国とペリ」に基づいてロベルト・シューマンが1840年代前半に作曲したオラトリオ *Das Paradies und die Peri* は，今日も演奏されている。

II

1）**М. П. Алексеев, Русско-английские литературные связи (XVIII век-первая половина XIX века), Литературное Наследство, XCI (М., 1982), стр. 407.**
なお，本稿は同書に依拠すること多く，以下の記述のほとんどは同書第５章「バイロンとロシア外交」，及び第８章「トマス・ムアと19世紀ロシア作家」に基づいている。

2）**А. С. Пушкин, Собрание сочинений в десяти томах (М., 1974-1978), т. 9, стр. 40.**
なお，池田健太郎『プーシキン伝』（中央公論社，1974年），161-162頁を参照。

3）**« Вестник Европы »**

4）**« Сын отечества »**

5）**« Полярная звезда »**

6）**Алексеев, стр. 431; Декабристы Антология в двух томах (Л., 1975), т. 1, стр. 269-271.**

7）L. Bagby, *Alexander Bestuzhev-Marlinsky and Russian Byronism* (Pennsylvania, 1995), p. 75 ;
Алексеев, стр. 431.

8）Bagby, *op. cit.*, p. 224. この問題に関するプーシキン側からの記述がある。『プーシキン全集』(河出書房新社，昭和48-49年)，第６巻，166-167頁を参照。

9）Bagby, *op. cit.*, pp. 225-226.

10）*Ibid.*, p. 331. ベストゥージェフとバイロンの *Darkness* との関係が同書に詳述されている。331-343頁を参照。

11）**Алексеев, стр. 413.**

12）**Там же, стр. 411.**　また，池田，前掲書，201-202頁を参照。

13）**Пушкин, т. 6, стр. 302.**『プーシキン全集』，第５巻，63頁。

14）**Пушкин, т. 9, стр. 61.**

15）草鹿外吉訳。
Пушкин, т. 1, стр. 236;
『プーシキン全集』，第１巻，171-172頁。

16）栗原成郎訳。一部改変。
Пушкин, т. 9, стр. 168-170.
『プーシキン全集』，第６巻，174頁。また，池田，前掲書，261頁を参照。

17）『プーシキン全集』，第５巻，30頁。

18) わが国でこの問題を扱ったものとして，池田，前掲書，161-164頁，及び岩間徹『プーシキンとデカブリスト』(誠文堂新光社，1981年)，174-176頁，などがある。
19) Пушкин, т. 9, стр. 202.
20) Пушкин, т. 6, стр.19 . なお，Алексеев, стр. 407-408 を参照。
21) 邦訳がある。『プーシキン全集』，第5巻，116-122頁。

III

1) Алексеев, стр. 662.
2) « Соревнователь просвещеня »
3) « Новость литературы »
4) « Благонамеренный »
5) « Дамский журнал »
6) コズロフの作詞とされるロシア民謡『夕べの鐘』とムアとの関連が詳述されている。 Алексеев, стр. 757-760 を参照。
7) Н. В. Гоголь, Собрание сочинений в девяти томах(М., 1994), т.7, стр. 19-20; Thomas Moore, *The poetical works of Thomas Moore*, in ten volumes (London, 1841), vol. 7, pp. 29, 35, 48, 50 ;『ゴーゴリ全集』(河出書房新社，昭和52年)，第1巻，28頁。
8) 例えば次の2つの詩。
'Не думай, чтоб я был достоин сожаленья', 'Нет, я не Байрон, я другой'.『レールモントフ選集』(光和堂，1974年)，第1巻，254頁，277頁。
9) この詩の成立の過程については次を参照。
М. Ю. Лермонтов, Собрание сочинений в четырех томах (М., 1975), т. 1, стр.594-595.
10) Алексеев, стр. 715; Декабристы, т. 2, стр. 327.
11) 最近では，『ロシア史』(山川出版社，1994年)，第2巻，148-151頁に紹介されている。
12) Декабристы, т. 1, стр. 337-338.
13) Там же, стр. 336.
14) Пушкин, т. 2, стр. 23; В. А. Жуковский, Баллады и стихотворения (М., 1990), стр. 128-129;
『プーシキン全集』，第1巻，208頁。
15) 『プーシキン全集』，第5巻，451頁。
16) Пушкин, т. 5, стр. 361;
17) Пушкин, т. 9, стр. 34.
18) Там же, стр. 40.
19) Там же, стр. 140.
Там же, стр. 202-203.

IV

1) この手紙の一部は邦訳されている。『バイロン全集』，第4巻，63-64頁。